

# 平成25年度八重山群島病害虫発生予報第12号(3月予報)

## I 3月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	20	20	40
平年並	40	40	40
低い(少ない)	40	40	20

(平成26年2月21日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
八重山群島(石垣島)	20.8	23.5	18.5	131.5	112

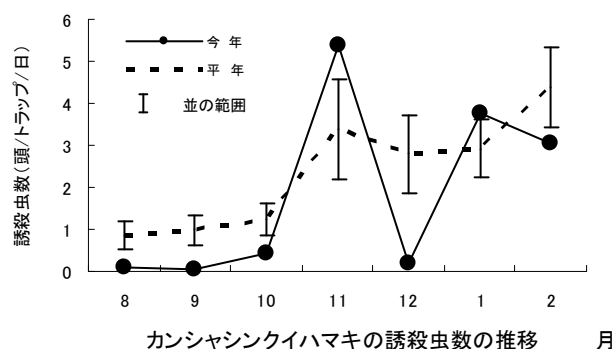
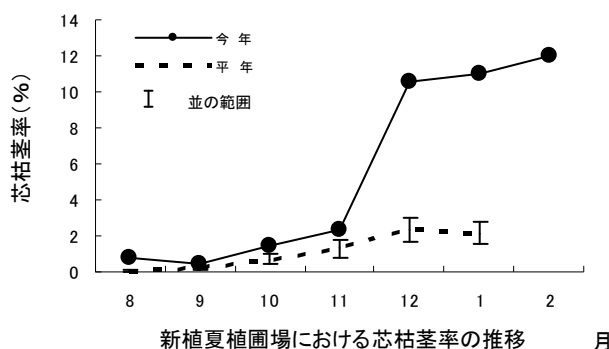
(沖縄気象台発表・統計期間1981~2010・資料年数30年)

## II 3月の発生予報および防除上の注意事項

### 1 さとうきび

#### ○ カンシャシクイハマキの防除対策

- 2月中旬の調査の結果、新植夏植圃場における芯枯茎率は12.0%であった。
- 2月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は3.1頭(前年1.7頭、平年4.4頭)と平年よりやや少なかった。

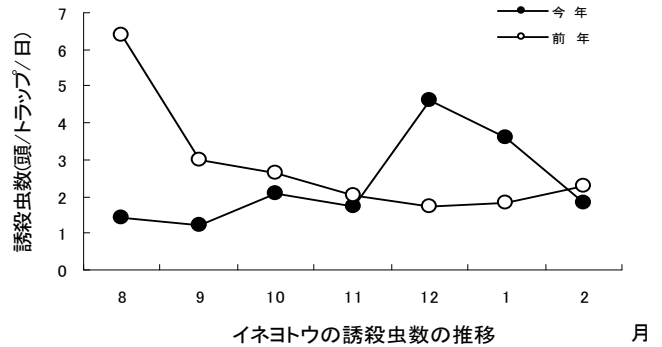
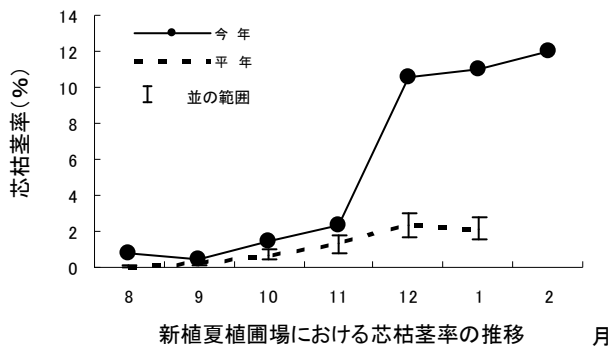


#### <防除上注意すべき事項>

- ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる
- 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- 植え付け時および培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- 平成24年度病害虫発生予察技術情報第3号参照(平成24年6月11日付)。

○ イネヨトウの防除対策

- a 2月中旬の調査の結果、新植夏植圃場における芯枯茎率は12.0%であった。
- b 2月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は1.8頭(前年2.3頭)であった。
- c 芯枯茎切開調査の結果、確認されたメイチュウ類幼虫のうち87%がイネヨトウであった。



<防除上注意すべき事項>

- a カンシャシクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。
- b 平成25年度病害虫発生予報第6号(平成25年8月30日付)号コラム参照。

## 2 マンゴー

○ 炭疽病の防除対策

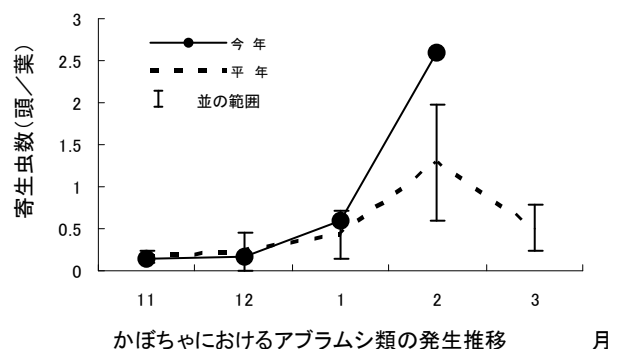
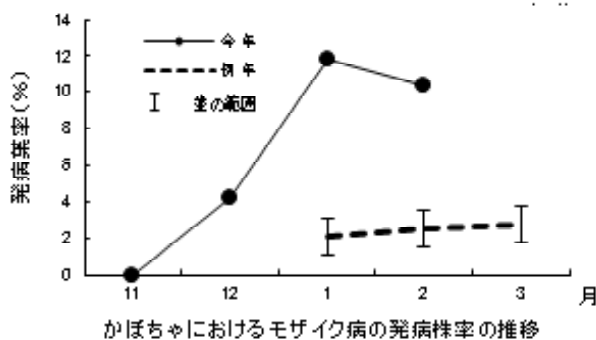
- a 2月中旬の調査の結果、一部圃場で発生していた。
- b 本病の病原菌は花芽、花序、葉などにすでに潜在感染していることが知られており、収穫果実への被害軽減のため、今後袋がけ前までの防除対策が重要である。
- c 罹病した新梢、残渣は、速やかに施設外に持ち出し処分する。
- d 結実期には治癒効果のある薬剤を選定し、定期防除に努める。
- e 平成25年度病害虫発生予報第6号(平成25年11月29日付)コラム参照。

## 3 かぼちゃ

(1) モザイク病

発生程度 : 多  
予報の根拠

2月下旬の調査の結果、発病株率は10.4%(前年2.7%、例年2.6%)と例年よりやや高かった。

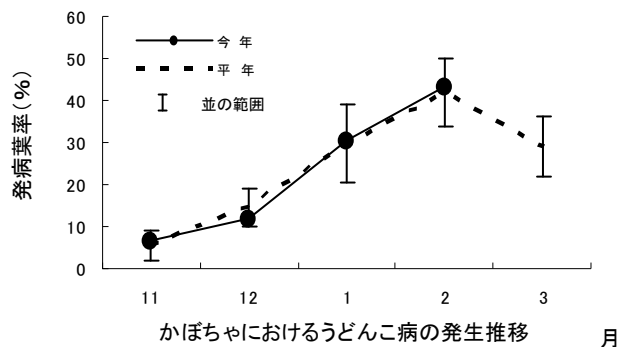


<防除上注意すべき事項>

- a 媒介虫であるアブラムシ類の葉当たり虫数は2.59頭(前年0.22頭、平年1.29頭)と平年よりやや多く、有翅虫が多く観察された。
- b 圃場周辺に防風対策を兼ねた防虫ネット等の資材を利用して有翅虫の飛来侵入を防ぐ。
- c 圃場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除去する。
- d 発病株は発生源となるので、みつけ次第抜き取りビニール袋に入れるなどして密閉処理し、圃場外へ持ち出し処分する。
- e 本病は汁液伝染するので、ハサミや手の消毒、洗浄を行う。
- f 収穫後の残渣は発生源となるので速やかに片づける。

- (2) うどんこ病  
 発生程度 : 並  
 予報の根拠

2月下旬の調査の結果、発病葉率は43.3%(前年43.6%、平年42.9%)と平年並であった。



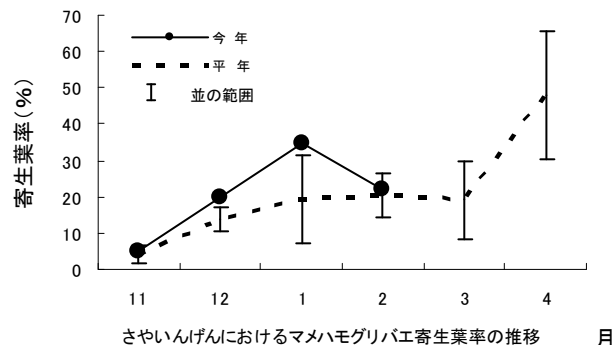
<防除上注意すべき事項>

- 発生源となる株元の不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- 着果期以降、草勢の低下に伴い被害が急激に広がる場合があるので防除を徹底する。

### 3 さやいんげん(施設)

- (1) ハモグリバエ類  
 発生程度 : 並  
 予報の根拠

2月下旬の調査の結果、寄生葉率は22.0%(前年9.4%、平年20.2%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 摘葉等による残渣は成虫の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして、圃場外に持ち出し処分する。
- 本種は薬剤抵抗性が発達し、また野外に多数の在来天敵が存在することから、天敵に影響の少ない選択性殺虫剤を使用する。

○ 菌核病の防除対策

- 2月下旬の調査の結果、発病株率は6.7%(前年0.3%、平年8.2%)と平年並であったが、一部圃場で多発していた。
- 例年発生時期に当たるので、予防防除に努める。
- 多湿時に発生しやすいので、不要な老葉・下葉を除去し、透光通風を良くする。
- 発病部位は早めに除去し、ビニール袋に入れるなどして圃場外へ持ち出し処分する。
- 平成25年度病害虫発生予報第10号(1月予報)コラム参照。